

諦めないことの大切さ、挑戦することの大切さ

経営情報学部2年 伊東 真由

高校生までの私は、過保護に育てられてきて何か問題があればお母さんに相談し、高校の先生にアドバイスをもらっていました。しかし、受験勉強は誰かに相談して解決することではなく自分自身を鼓舞させて本番までに実力をあげ、ここまでやってきたから大丈夫だという自信が必要だと客観的に分析することができたのも大学に入って落ち着いてきたころでした。当時の私はぬるま湯に浸かっていて、模試の結果もテストの結果も第一志望に安全に受かる。その言葉だけで私は自分を過信してしまい、黙々と塾や予備校に通わずに勉強していました。本番は、いつもの学校で受けるわけでもないし、周りは塾のテキストだらけ。暗黙の重圧が私に押し寄せて来ました。結果は、悉く連敗。周りの友達が続々受かっていく中で3月後半まで戦い続けました。ここまで苦しむなら諦めようとした時もありました。しかし、やりきるまでやってみようと思い、最終的に3つの大学に受かることができました。私が一番学びたいと思っていた法学部にも合格しました。しかし、なぜ多摩大学を選んだのか。それはどこにも受からず、一番苦しかった時に出席する際に対応してくれた職員さんのおかげでした。今日出願しないと締め切ってしまうそんなギリギリな私にも丁寧に対応してくれました。

入学して、私は受験に失敗したこの屈辱的な思いを糧に大学では一生懸命に勉学に励もう。そう思いました。多摩大学は実学で、積極的に取り組む学生はしっかりとサポートしてくれるし、小さい大学だからこそ職員や教授に大学生活面を気軽に相談できます。私が大学に対して感じていることは学生に機会をくれるということです。学年問わず授業で学んだことを実際に外部に出てイベントを開催する運営を行い、インターゼミに通い寺島学長や大学院生、教授から指導を受け、自分で考えて発表する力を培い、ゼミで商品を企業とコラボして開発してみるもありました。私はできないと思うのではなく、何事もやってみないとわからないと思えるようにしてくれたのが様々な実践の機会でした。その流れに乗って中国にも研修に行きました。それこそ過保護に育てられた私は、海外は一生行くことはないだろうと思っていたにもかかわらず、歴史が好きで大学で学び始めた中国語の本場に自分の肌で感じてどう価値観が変わるのか、自国の常識は本当に常識なのか。など、考えるたび、日本から出てみたいと思うようになり実践しました。帰国後、自分の世界観がとて大きくなりました。ここでも実行して挑戦することは大切だと感じることができました。この気持ちを忘れずに3年生になっても4年生になっても上を目指し向上心を持ち日々を過ごしていきたいと思っています。



インターゼミ 2018年度サービスインターテインメント班



広東研修 広州タワー前で写真撮影

人を信じること

経営情報学部4年 石川 将基

私は高校時代、進学先をどこにしようか全く考えていませんでした。自分の将来設計図ができてない状態で“とりあえず将来の夢を考えるために4年制の大学に行こう”という軽い気持ちで4年制の大学を選ぶことにしました。

しかし大学を選ぶにも様々な学部学科が存在し私はどこが自分に合う大学なのか、全く見当が付きませんでした。なので、私はいろいろな大学のオープンキャンパスに行きました。その中の一校が多摩大学です。多摩大学のオープンキャンパスではAO入試の面接対策ができる個人レッスンのようなものがあり、それをやってもらった際に「ここがいい所だと思うからもっと強調したほうがいいよ」とか、「ここはあまり強調しなくてもいいと思うよ」とまだ多摩大学に入学しているわけでもない、ましてや多摩大学に入学をするということすら決めていない、ただ、“オープンキャンパスに来て個人相談会に来た”たったそれだけの関係性の私にでさえ、優しく丁寧に教えてくださったことに対して、とても面倒見の良い大学だな、そう他の大学にはなかった魅力を感じたので入学を決めました。

多摩大学に入ってから、私は「周りの人に頼る」ということができるようになりました。大学入学までは周りの人に極力頼ろうとしないで、一人で色々考えこんだり作業を一人でやったり等、周りの人に相談すれば気持ちが楽になったり、作業を一人で抱え込まなくてよかった場面があったにもかかわらず、周りに頼るということをやりませんでした。それは、人に頼ったら迷惑が掛かってしまう、そもそも頼ってもいいほど仲がいいと思ってきているのか等の様々な根拠のない疑心暗鬼があったからです。

しかしこの大学に入学しテニスサークルのアボガドに入ってから、先輩に「大学生活で悩んでいることないか?」とか、うまくラリーができなかった初心者の私に「こうやってやるんだよ」と、やさしく教えてくれたり、心配してくれたりしました。先輩の他にも、多摩大は他の大学と違い敷地が狭いおかげで授業間の移動や、昼食のタイミングなどに様々な先生と出会えます。そのおかげで何か心配事や授業内の質問もしやすいということに加え、先生の方から「単位大丈夫か?」「講義で心配ことがあるか?」などの質問や相談に乗るよという声掛けがあります。

その他の大学にはない、学生と先生の距離の近さがあったおかげで私は知らぬ間に今まで持っていた疑心暗鬼な気持ちがなくなっており、先輩や先生方に自分から相談しに行くなど周りの人に頼るという行動をとるようになっていました。

そのおかげか、自分には何ができるのか、何ができないのか、そのできないことはどうやって周りの力を借りるのか、そういうことが自分自身で分かることができました。そして困った時には周りに頼るということを実感したため、私は自分にできることを私生活の中で全力で取り組めるようになり、ゼミではゼミ代表に、サークルでは副代表を務めることができました。



テニスサークル アボガドの集合写真

2019 年度学生会執行部会メンバー

学生会執行部

学生会執行部長：田島 凜太郎（3 年）

副部長：佐藤 涼太（1 年）

書記：野田 千恵（1 年）

会計：川端 将暉（1 年） 北村 遼太郎（1 年）

田中 奎太（1 年） 田中 千尋（1 年）



学生会執行部部長

2019 年度新入生向けサークル合同説明会

経営情報学部学生会執行部長 3 年 田島 凜太郎

今年も例年通り、4 月 8 日（月）・9 日（火）の 2 日間に 4 階学生食堂で新入生向けサークル合同説明会を開催しました。昨年は例年と比較しても多くの新規サークルの設立がありました。多くの学生から意見が出る多摩大学のサークルの少なさを払拭する結果となり、今年度の新入生向けサークル合同説明会でも、その影響はとて強く、サークル、委員会、部活などのさまざまな学生団体が近年最多の 17 団体も参加してくれました。

説明会当日、開始 20 分前から食堂前に新入生が並び開始を待つなど、多くの新入生がサークルに興味を持っていることが確認できました。また、開始後も多くの学生が複数のサークルの説明を聞いて興味を持ち、入会申し込みをする姿がありました。

テニスサークル「アボガド」は例年多くの新入生を獲得していますが、今年もまた多くの新入生を獲得していました。また、近年新入生の獲得に困っていたバドミントンサークルの「バドワイザー」は今年度の説明会で多くの新入生を獲得することに成功し、その数は 20 人をを超えるものになったとのことです。また、昨年新規サークルで設立したゲームサークルの「e すぽ一つサークル」やフットサルサークルの「ベルフェスタ」も多くの新入生を獲得することが出来て、公認サークルへの昇格条件を満たす人数となるなど、今年度の新入生向けサークル合同説明会は多摩大の課外活動、サークルを活発にする大きな要因となったと思います。

新入生からの評判も良く、今回の説明会で様々なサークルを知ることが出来たとの声も多く上がっています。また、例年から見てもサークルや委員会など課外活動を行う学生の割合は上がっていると思います。

学生会執行部として、今年度の新入生向けサークル合同説明会は、在学生、新入生両者ともに有意義なものとなったと実感しました。



今年度の活動について

新入生向けサークル合同説明会では、学生会執行部もまた多くの新入生からの入会希望がありました。そして、近年最多のメンバーになりました。そのため、今年度はより多くの学生がこの多摩大学の学生生活を有意義で楽しむことの出来るイベントやサービス、施設などを新規メンバーで考案していこうと思います。また、サークルや委員会と協力しサークル主催イベントの開催、多摩祭では多摩祭実行委員会との協力により良いものにしていきたいと思っています。

挑戦と獲得 ～好きな事をして生きていくために～

グローバルスタディーズ学部 4年 村井 幸介

これから私が大学生活の4年間で挑戦したこと、それによって得たもの、変わった事について話していきます。

私が多摩大学に入学した理由として、面接では英語の教員になりたい、AEPのシステムがいい、外国人の先生が多く英語を身につけやすいと思ったなどと言っていました。正直なところ家が近くてフリースタイルフットボールを練習する時間ができるからというのが本当にこの大学を選んだ理由でした。(フリースタイルフットボールとは、サッカーの練習で使われるリフティングをパフォーマンススポーツに発展させたスポーツです。)

私は3歳から中学3年生まで野球をやっていて、引退した後に友達に誘われフリースタイルフットボールを始めました。最初はひたすらたくさん技を覚えることに夢中で、世界大会に出たりパフォーマンスをしたりする事は考えたりしませんでした。練習していくにつれもっと大きなステージに立てみたいという想いが強くなっていきました。それから少しずつ大会に出場したり、パフォーマンスをする機会が増えていきました。私が世界大会を意識するようになったのは大学生になってからです。

理由は、同世代の友達が世界で戦う姿を見て、自分も一緒に肩を並べて戦いたいという想いが芽生えてきたからです。私は1年生から2年生の途中までは教職科目を取りながら練習していましたが、2年生の途中に、世界大会(Superball2018)に出場することが決まり、世界と戦うなら教職科目と両立して練習する事は難しいと考え教職課程を辞めることを決断しました。世界大会にはいくつかの出場項目があり、私が出場するのは個人バトル、ダブルルーティンでした。個人のバトルは1人3ターン30秒を交互に繰り返して勝敗を決めるものです。ダブルルーティンは予選、決勝共に持ち時間3分で自分たちで自由に曲と技の構成を決めてパフォーマンスする項目です。私は個人バトルよりもダブルルーティンに力を注ぎようと思っていました。理由は、中学3年生の時からずっと一緒に練習をしてきて、お互い個人で頑張ってきた相方で同級生でもある天笠雄斗君の存在があったからです。私は同じ年のチームメイトが2017年の世界大会で活躍する姿に刺激を受けてダブルルーティンと一緒に出ようと話をもちかけOKの返事をもらいました。

ここで、世界大会へ挑戦する話をするに欠かせない、私の大学生活内での人間関係の変化について話そうと思います。1、2年生の時はフリースタイルフットボールができていれば学内の友達なんていない、関わる必要がないと思い、普段から負のオーラを出しまくっていました。しかし、3年になりダンスサークルの後輩達と関わるようになってから自分の学園生活が大きく変わりました。自分から友達に話しかけに行くようになり、周りの人からは雰囲気柔らかくなったと言われることが増えました。フリースタイルフットボールのことを応援してくれる人も沢山増え、スポーツ自体を究めるだけでは人は付いて来ないと強く思いました。そこから、後輩と一緒にパフォーマンスをしたりして、先輩としての責任感も持つようになり、より行動でたくさんの事を示していかなければならないと感じました。また、元々自分が人生を楽しむために、頑張ってきた事ですが、応援してくれる人たちの為にも頑張りたいと思うようになりました。

そして世界大会を迎えました。私はこの世界大会で大きな決断をしようとして決まっていた。それは、この先のスポーツで生きていくかという事です。もちろん全力で楽しむ事も忘れてはいなかったですが、次の年が就活の年という事もあり、ここで決断するべきだと考えました。大会は毎年チェコで行われる、この競技を始めてからずっと憧れていたステージに立てる事になり、会場に着いた瞬間動画でずっと見てきた風景があり、感動すると同時に闘志が一気に火がつかしました。個人戦はトップ64で負けてしまいましたが、ダブルルーティンは予選を3位で通過しました。決勝のステージはプラハ城の隣にある巨大メトロノームのところに会場を設営し行われ、パフォーマンスの後半に風でボールが1つステージ外にいったというトラブルがありましたが、自分達にしかできないパフォーマンスを世界に見せられた事が凄く嬉しかったです。とりあえずやりきったねと相方と話して、その後のバトルを見ているときいきなり声をかけられ、「お前たち3位だからステージ裏行って」と言われました。本当に信じられなくて嬉しくてフリー

スタイルフットボールを始めてから初めて涙しました。正直、表彰台に上られる自信はなかったですが、こうして結果で周りの応援に応えられて本当によかったです。ただ、個人的スキルが世界との壁を感じ、悔しい思いもありました。この世界大会で、私は本当にこのスポーツが好きで、このスポーツ以外で生きていく事が考えられなくなり、フリースタイルフットボールで生きていく事を決意しました。

世界大会が終わってから、フリースタイルで生きていくための活動をしていくことになりました。具体的にはこのスポーツを私たちのプレーを見てもらい実際に触れてもらうことで魅力を伝え、日本中にこのスポーツが広まるために行動していきたいと思っています。現在ではスクールやチーム(僕らが所属しているチームはTeamAirtechnicianという国内で最も最強メンバーが集ったチームです)でのパフォーマンス活動も活発になってきて、チューブも活用して普及活動を行っています(チャンネル名はクレイジーボールで私はチューブの動画編集もしています)。

今年で私は大学4年生になりました。今年の夏も世界大会に出場します。もちろん世界一を本気で獲りに行きます。また、学生生活最後の年ということで、学内生活においても強い想いがあります。それはサークル活動です。ダンスサークルは今年も学園祭でパフォーマンスを披露します。私はダンスサークルの後輩たちが大好きです。なので、その後輩たちと最高に盛り上がるパフォーマンスをして学園生活で一番の思い出を作りたいです。絶対に学園祭見に来てください。後悔はさせません。

最後に、後輩たちへのメッセージを送りたいと思います。そのメッセージとは「好奇心を無駄にしない」「身の丈にあった努力をする」「楽しむ」という事です。なんでも本気で挑戦した方がいいとは私は言いません。大人になるにつれ頑張る事は強要されていきますし、皆さんが過ごす大学生生活期間は、最も多くのことに、最も自由に触れる事ができる貴重な時間だと私は考えます。なので、少しでも興味を持ったことにまずは触れまわってください。そうする事で自然と自分が本当にやりたい事、自分に向いているものが分かってくるはず。自分がやってみたら、と、とか自信のない人は思ってしまう。なかなか踏み込むことができないかもしれません。そういう時は、自分にセンスがあるかどうかという計り方ではなく、自分が楽しめるかどうかで考えてみてください。周りをみて、自分を鼓舞する事は良いと思います。しかし、周り自分を比べる事で自分をマイナスに捉えてしまう事は、歩んでいる足を止めてしまいます。私は周りには良く楽しそうだなとか、羨ましいと言われる。しかし実際には自分の周りには自分よりも凄い人は沢山いて自分はまだまだだなと感じて萎えてしまう事もあるし、学業とフリースタイルの活動を両立することもありきです。好きな事を続けるイコールずっと楽しいというわけではありません。ですが、きつい時、辛い時に自分が前を向けるのはそれが好きだからなんです。なので皆さんには自分が心から好きになれることを見つけて欲しいです。だから私はこの最後の一年間で、いや、大学を卒業した後も、自分が挑戦し続ける姿をたくさん見せて、みんなが興味を持ったことに対して一歩だけでも踏み込む勇気を与えられたら良いなと思います。



ダンスサークルの学祭後の集合写真



世界大会の決勝でのパフォーマンスの様子



世界大会で表彰式の様子



チームメンバーでの集合写真

クルマと運転と私

多摩大学副学長・経営情報学部学部長 杉田 文章



この話に、共感していただける方はいらっしゃるのだろうか？という不安を感じつつ、原稿を書かせていただいているが、暇で暇で仕方がない、という方がいらっしゃるなら、読んでみていただきたい。

私が育った家庭には、自動車を運転する者が一人もおらず、免許を取ったのも、自家用車を運転したのも、家族の中で私が第一号であった。私自身は先輩や友人が車を所有し運転しているのを見て、自分も欲しい！と思ってはいたが、我が家に自家用車が来たのは、とても辺鄙なところにある施設にお世話にならざるを得なくなった祖母に、家族が会いに行くためには、どうしても車と、金のかからない運転手が必要になったからだった。

自動車を使う生活は、私が大学4年生の時に、こんなことをきっかけに始まったに過ぎなかったが、以来これまでかれこれ40年近く、本当に車に依存した日々を過ごしてきた。

長く乗ったから運転が好きになったのか、好きだからずっと運転してきたのか、自分でもよくわからないが、とにかく自動車を運転することに喜びを感じるようになった。

私の自動車に対する価値観に、最も影響を与えたのは、徳大寺有恒という人だ。徳大寺氏は、「間違いだらけのクルマ選び」というベストセラーを毎年執筆する、人気の自動車評論家であった。私がこの本に出会った当時は、日本の自動車という製品はまだ発展途上でありながら、消費者の欲望拡大の時代の中心的商品の一つだった。そのような状況の中で、氏はメーカーに媚びを売らない辛口の評論家、という体であり、そういった視点から見たメーカーのありかたやマーケティング手法についてのコメントも多く、今から考えると、法学部にいた私が、「経営」とか「マーケティング」のような概念らしきものをはじめて意識したのも、徳大寺氏の本を読んだことだったかもしれない。（徳大寺氏の執筆によるこのシリーズは、2007年頃まで続き、エネルギーや環境問題、自動車の脱エンジン化（電動化）などにも多くの考察を与えている。）

徳大寺氏の著作を通じて学んだことは多い。運転技術に関すること（と言っても決してマニアックなことではなく、ごく普通のドライバーにとって大切なこと）もたくさんあるが、やはり、車を運転するということはどういうことなのか、について、多くのことを学び、考えさせられた。

たとえば、高級車の乗り心地について、「とにかく静かでスムーズな乗り心地を目指す各社の競争になっているが、自動車の運転は本来一定の緊張を伴うものであり、あまりに車外の情報を遮断することが本当に是なのか」と述べられている。「一定の緊張」は、完全自動運転でない限り必要だという点でも、また、自動車という1トン～数トンの大きな物体を自分の意思で動かす喜びという点でも、今なお考えるべきテーマだな、と私も思っている。

また、スイッチ一つで屋根が車体後部に格納されてオープンカーになる、かなり高級な車へのコメントでは、欧米の「本当の富裕層」が、そんな利便性など興味がない（彼らは、自分で屋根を取り外すことを不便とは思っていないということらしい）ことを知らない日本のメーカーならではの「ぜいたく品」と皮肉たっぷりにコ

メントしていて、こんな文章を読んで、車の価値や車の楽しみは何なのか、と考えていたことを思い出す。

そして、放っておけばすぐ錆びが浮いてくるボディを懸命に洗い、エアクリーナのフィルタや、ヘッドライトのバルブは、ディーラーに頼むと高いので、ホームセンターで探してきて自分で交換し、エンジンのスパークプラグを引き抜いて金属ブラシで磨くといった面倒な作業を、「楽しんで」いた。

カーナビなどないので、知らない土地へ行くと、コンビニで地図を買ってあちこち迷いながら目的地を探し、携帯電話もネットもつながらない「個室」の中で自分自身との対話も「楽しんで」いた。

しかし、この40年、私が100万キロ弱を走る間に、自動車は本当に大きく変わった。

全く洗車などしなくても車体が錆びるようなことはなく、部品を自分で交換したりすることもなくなった（できなくなった）。ナビと携帯が勝手につながって、仕事の電話もどんどんかかってくる。

さらに、そう遠くない未来に、ガソリンや軽油で走る車は消え、また運転手が「操縦」することもなくなるのだろうか。それは「便利」であり「快適」であり、「安全」なのだろうから、その流れに抗うことはできないだろう。しかし、自分の認知、判断と意思によりクルマという道具をメンテナンスし操縦する、という、道具との対話も確実に失われるだろう。

数年前ローマの街で出会ったジェントルなプロ運転手は、ディーゼルエンジンのメルセデスベンツEクラスを、なんとクラッチ付き（オートマチックではないということ！）で乗っていて本当にうらやましいと思ったものだ。でも、日本ではそういう選択肢はあまり残っておらず、残念至極。（この話が分かる方は、結構年配の方だけかもしれないが、どうかご容赦を。）

まだもう少しの間、私は車を運転し続けると思う。楽しみは減ったかもしれないが、「緊張感」をもって、絶対無事故で、自分のカーライフをいつの日か閉じる、ということが現在の目標だ。



思い出の書
「間違いだらけのクルマ選び」